

第 34 回医療薬学公開シンポジウム開催報告

愛媛大学医学部附属病院
荒木博陽

平成 21 年 9 月 12 日(土)に、愛媛県薬剤師会館（松山市）において日本医療薬学会主催の第 34 回医療薬学公開シンポジウムを開催致しました。今回のテーマは「医療薬学における専門薬剤師」とさせていただきます。日本病院薬剤師会が取り組んでいます専門薬剤師制度が軌道に乗り、がん、感染制御、精神科、HIV、妊婦・授乳婦の専門薬剤師育成が行われています。今回は時間の都合で、妊婦・授乳婦に関してはシンポジストを立てることは致しませんでした。残る 4 部門の現場で活躍する専門薬剤師にそれぞれの立場から現状や将来に向けた取り組みなどについて医療薬学の観点からお話ししていただくことに致しました。愛媛県のみならず、四国、中国、近畿、東海、関東地区からの参加をいただき、参加者の数は 92 名でありました。

まず、特別講演と致しまして前名古屋大学医学部附属病院薬剤部長で、現在 6 年制の学生教育現場である名城大学薬学部で教授をされている鍋島俊隆先生に「専門薬剤師に期待する」と題したご講演をお願いいたしました。先生は薬剤師が新たな薬物療法を提案すること、有害事象の防止や検査値のチェックなどすることでどれだけ患者に、あるいは病院に貢献できるか数値で出すことの重要性に言及されました。さらに、情報検索能力や臨床に立脚した研究の重要性をお話しされましたが、実際の研究の進め方に関して、日頃の学会発表や論文発表の聞き方、読み方から論文のまとめ方まで具体的にお話しくださいました。専門薬剤師の未来を信じて期待してくれているという気持ちが強く伝わる講演でした。

シンポジウムは広島大学病院の木平健治先生の司会のもと、専門薬剤師の先生方に講演していただきました。まず、感染制御専門薬剤師としての取り組みと成果と題して愛媛大学医学部附属病院の田中亮裕先生が講演されました。愛媛県下の TDM 普及に向けた取り組みでは、バンコマイシン療法の投与設計に介入することで臨床的有用性が認められ、TDM の愛媛県内への普及が図れたこと、院内 ICT での抗菌薬使用量サーベイランスでは、薬剤師が関与することで MRSA 検出率減少に貢献できたことを報告し、薬剤師の活躍が病院にとっていかに必要であるかを話されました。HIV 専門薬剤師の役割と今後の課題については広島大学病院の畝井浩子先生が話されました。多剤併用療法をはじめとした抗 HIV 療法を患者に対して如何に成功に導くか、薬剤師が他の職種と連携しながらかかわることの重要性について話されました。しかし、HIV 感染症に関する正しい知識の普及が不十分なこともあり、患者拡大に歯止めがかかっていない現状があるが、専門薬剤師としてさまざまな分野の薬剤師と連携して対応する必要性を訴えられました。精神科臨床で求められる専門薬剤師としての職能について松山記念病院の梅田賢太先生がお話しになりました。薬

剤師は生物学的アプローチに加えて、心理的なアプローチも実践し、患者に対して心身両面から寄り添う医療者であらねばならないとの思いをクリアに解説していただき、今後の精神科薬剤師の目指す方向性を示していただきました。最後にかん患者に対する専門薬剤師の取り組みについて岡山大学病院薬剤部の松永 尚先生がまとめられました。岡山大学での現状を具体的な症例を挙げて解説され、外来化学療法に関わりや緩和ケアの取り組みにおける専門薬剤師の役割について話されました。また、地域の薬剤師との連携の重要性と具体的な連携の実現に向けた取り組みについてお話しされました。座長の木平先生が発表毎に特別講演演者の鍋島先生にコメントを求められ、鍋島先生も自分の思いやお考えを述べられ、専門薬剤師への期待がよりふくらんだように感じました。

以上、今回のシンポジウムについて簡単にご報告いたしました。専門薬剤師は各領域で指導的な立場で病院薬剤師のみならず地域との連携を図りながら患者の医療に貢献すると共に薬剤師の地位向上のためにより具体的なエビデンスをもって、特にその成果を数値化してアピールすることの重要性がより明確にされたのではないかと思います。